

帆船文化の

Succession of Sail Training culture

継承

かの文豪ビクトル・ユゴーは、帆船を“人間が創造した最も美しい建造物”と呼んだ。帆に風をいっぱい受け、自然の力で海を渡る帆船は、人の根源的な本能を刺激するのかもしれない。張り重ねたキャンバスが大気の息吹を受けるとき、一枚の布は生き物と化し、船を動かす原動力となって人々に高揚感を与え、そこに乗る者の心を解放させるのだ。帆船は、一人では動かすことはできない。嵐の中でも全員でロープを引き、目もくらむ高さのマストに登って帆を展げなければ、目的地まで行くことはできない。困難を乗り越えた時、海はその最高に美しい姿を見せ、共に乗った仲間との強い絆を与えてくれる。そして圧倒的な自然の力を無意識のうちに体に覚え込ませる。これこそが帆船による航海が与えてくれるものの本質だ。

文・写真=今井常夫

text & photos by Tsuneo Imai



上：帆船は誰にとっても初めての体験だ。セイルトレーニングは経験を問わず、参加した全員が自らロープを引くことによって帆船を走らせる
左：タッキングともなれば、巨大な帆の向きを変えるために、大勢で息を合わせてロープを操作する。共に乗った仲間との強烈な体験がすべてを教えてくれる

若者の心身の育成 ＝セイルトレーニング

帆船による外洋航海訓練は、一人前の船乗りとなるためのシーマンシップを養成するためにある。だからこそ、今なお世界中で海軍や商船の士官候補生の教育に帆船が使われているのだ。けっして大航海時代へのノスタルジアなどではない。1960年代から、帆船での体験が一般の若者たちの育成にも素晴らしい効果があることが認められるようになった。このような帆船による外洋航海体験プログラムを“セイルトレーニング”と呼んでいる。

英国においてセイルトレーニング協会が設立されたとき、名誉総裁に就任したエジンバラ公フィリップ殿下は、その趣旨を次のように述べている。

「人は青年期になり、肉体的には大人になると、他人から教えられることを拒み、大人のすることなら何でもできると思い上がるようになる。この時期の青年に必要なことは、他人と力を合わせなければ乗り越えられないような試練を体験させることである。セイルトレーニングの目的は、帆船の外洋航海を通じて必要とされるチームワークや決断力、他人を思いやる心を体験から学ぶことにある」と。

わが国における帆船の歴史

わが国も帆船との縁は深い。明治天皇が1877年に帆船〈明治丸〉で東北・北海道巡幸を終え、横浜に帰港された

帆船のセーリングの魅力はそのスケールの大きさにある。行方を遮る物のない外洋でのダイナミックな帆走体験は参加した者を魅了し、心を解放してくれる





史上初のアメリカズカップ奪取に沸いた西オーストラリアで、地元でのレース開催とそれに続く建国200年に向けて7年間にわたる民間募金によって建造された〈ルーウィン〉。若者たちの体験教育として広く支持され、人口わずか300万人の州で安定した運営を続けている。年間を通じた航海区域は州全域に及ぶ

7月20日が「海の日」と制定されている。

明治以降の近代化による海運業の隆盛とともに、商船員の教育に帆船が広く取り入れられ、〈大成丸〉のほか〈進徳丸〉〈日本丸〉〈海王丸〉、さらに水産学校の〈雲鷹丸〉など5隻の大型練習船を擁する帆船大国だった。また民間でも小型の〈義勇和爾丸〉が青少年を対象にした海洋訓練を行っており、1934年には東南アジア一帯からシンガポールへの遠洋航海を達成している。その航海は当時にあってもなお自由な雰囲気、昭和天皇が見学に乗船されたり、葉山沖で練習していたところ、御用邸で静養されていた皇后陛下からお菓子の差し入れを賜るなど、皇室との交流においても世界に先駆けたセイルトレーニング活動を展開していた。

終戦後、戦禍を免れた〈日本丸〉〈海王丸〉が船員教育に復帰し、1976年にはアメリカニューヨークでの建国200年記念帆船パレードにも参加を果たした。1980年代には両船とも日本独自の設計により二代目が建造され、現在も商船員の実習訓練に活躍している。

旧〈日本丸〉の代替建造運動当時、

や航海計器などの技術が進歩しても、自然の力は変わらないはずだ。荒天やトラブルに遭遇したとき、そうした自然の脅威に対応する根源的な方法や技術を、一瞬にして想起させるように体で覚え込ませることにあるのではないかと。まさにセイルトレーニングの本質をとらえた言葉だ。

帆船〈海星〉、〈あこがれ〉の活躍とその終焉

そして1983年、大阪市によって日本初の帆船パレードが大阪湾で開催された。これは一般の日本人が初めて、大型帆船が帆走している姿を実際に目にした記念碑的イベントだった。そこに参加した香港アウトワードバウンドスクールアウトワードバウンドの小型帆船〈ジファン〉こそ、大阪市が自らセイルトレーニング帆船を建造、運航するきっかけだった。

その後、民間資金による帆船〈海星〉が1991年から、大阪市による帆船〈あこがれ〉が94年から相次いで誕生した。〈海星〉は92年のコロンブス500年記念の大西洋横断国際帆船レースに参加しながら世界を巡った後、93年から

劇映画「海よお前が 帆船日本丸の青春」が舞台演出の巨匠・蜷川幸雄を監督に制作された。錚々たる俳優陣と共に商船高専の実習生が出演する画期的な演出で全国ロードショー公開された。この映画の撮影で、実際に東京からハワイまでの遠洋航海に同乗し、教官役で俳優としても出演した蜷川はこう語っている。

「帆船の意義はその直接性にあると思う。どんなに船が巨大化してエンジン

日本初のセイルトレーニング帆船〈海星〉。多くの人々の熱意と寄付、企業協賛によって誕生した



1988年のオーストラリア建国200年にイギリス国民から寄贈された〈ヤングエンデバー〉。今も政府機関によって若者たちを対象に運営されている

日本近海を舞台にセイルトレーニングを開始。〈あこがれ〉も95年には大阪の姉妹港メルボルンへの親善寄港の後、インドネシア独立50年記念帆船レースにも参加、2000年には大西洋全域で開催された帆船レースや寄港各地でのイベントに参加しながら、日本の帆船として初の世界一周航海を達成している。またその間に大阪市は、97年に香港から沖縄、鹿児島、大阪に至る東アジア初の国際帆船レースを自ら主催し、海洋都市として圧倒的な存在感を世界に示した。

しかし民間の運営による〈海星〉は、98年以降資金難が続き、2004年を最後に日本でのオペレーションに終止符を打ち米国のセイルトレーニング団体へ移管、運営母体の協会も解散した。そして2013年、大阪市の〈あこがれ〉は新市長の突然の決定によって20年

間に及んだ事業を止め、公開入札により売却処分された。両船の消滅とともに日本における一般市民を対象にしたセイルトレーニングはこのまま消えてしまうのだろうか。

〈海星〉が誕生するまで、日本ではセイルトレーニングを体験したことのある者は私も含めてわずか5人足らずだった。セイルトレーニングと言ってもだれも知らなかったし、そのための帆船のイメージすら皆無だった。それが〈海星〉と〈あこがれ〉が日本全国の海を駆け巡り、国内ほとんどの港に寄港し、さらに世界にその航跡を広げることによって、23年間に5万人以上の一般の人々がセイルトレーニングを体験した。

この5万人が日本のセイルトレーニングに残されている未来への事業資産ではないだろうか。

草創期に参加した若者が今では親

となり、自分の子供たちをセイルトレーニングに参加させたいと望んでいる声を聞く。一方では小学校時代に体験航海に参加した子供たちが今では成人し、これから本格的な外洋航海に乗りたかったと語っている。

*

セイルトレーニングのツールは帆船だ。しかしその事業運営は人の熱意の集まり以外の何ものでもない。〈海星〉と〈あこがれ〉が残した実績が昔話として記憶の中に消えてしまう前に、こうした体験者の声を集め、それを大きな力とすることができれば、日本でのセイルトレーニングが復活するだろう。そしてその声を聞けば、未だ経験したことのない人たちも新たに集まり、新しいチャレンジへとつながってゆくはずだ。体験者たちから生まれるこれからの動きに日本のセイルトレーニングの未来を託したい。